

Jan. 19, 2000

比較宗教学(異端と諸宗教)フィールドリサーチ

富士大石寺顕正会について

教職志願者コース4年

野町 真理

はじめに

私の母と妹、そして母方の祖父母は、今なお創価学会の信仰を持っている。私も幼い時には御本尊の前に座らされ「南無妙法蓮華經」という題目を唱える勤行というものをさせられていた。ご本尊に向かって「南無妙法蓮華經」と唱えれば、「願いかなわざることなし」と教えられた。夜暗い所を通る時など怖さを覚える時には、題目を唱えたりしていた記憶がある。しかし、物心ついた時から創価学会の信仰は、他力本願のご利益宗教だということを感じた。また、ちょうど中学を卒業して寮生活を始めたこともあって、その教えからは遠ざかっていった。

その後私は、何のために生きるのかわからない故に、空しさを覚えるようになっていった。当時私にとって、宗教とは弱い人間のすることであって、私は神や仏に頼るほど弱くはない人間だと思って生きていた。しかし、いったい何のために勉強し、何のためにいい大学に入り、何のためにいい会社に就職し、結婚し、死んでいくのか？それがわからないために、次第に生きる力がなくなっていった。当時、お金のため、あるいは食べるため、あるいは地位や名声を得るためだけに生きているような人々を見て、ニヒルに見下していたのを思い出す。そのような中でキリストを信仰している友人に出会った。私にとって、それがイエス・キリストに出会うようになったきっかけであった。私は洗礼を受けたことを後から母に話した。そのとき母に「真理が遠くに行ってしまった。」と泣かれた。また、創価学会の幹部の方や祖父母らに囲まれ、「基督教は邪教で神はいない！」と説教をされた。しかし、キリストに出会った私は、生きる目的と意味を知り、生きてて良かったという喜びにあふれていたもので、一生懸命伝道し始めた。

最近大学生伝道をしている中で、創価学会と分かれた富士大石寺顕正会というグループに属する青年との出会いがあった。今回は、頂いた資料について、また、彼といろいろ話している中で感じたことを報告をする。

資料名:「日本国民に告ぐ! 日蓮大聖人に帰依しなければ日本は必ず亡ぶ」

執筆者:富士大石寺顕正会 会長・浅井昭衛

内容:

富士大石寺顕正会は富士大石寺を総本山として、六百余の末寺を包括する宗教法人「日蓮正宗」の信徒団体である。創価学会も、少し前までは同じく日蓮正宗の一信徒団体であったが、政治的野心を懐いて顕彰会を解散処分にしたと書かれてあった。しかし顕正会はこの弾圧に屈せず、1997年6月には50万の信徒を持つに至っているようである。日蓮正宗はもともと日蓮を大聖人、本仏として拝しているが、仏教の中でも排他性が強く、折伏という強引な勧誘をすることで知られている。顕正会も同様である。実際の信仰の要は御本尊に向かって「南無妙法蓮華經」という題目を唱えることである。「日本国民に告ぐ! 日蓮大聖人に帰依しなければ日本は必ず亡ぶ」では政治的、あるいは社会的、道徳的な現代日本の腐敗ぶりを、末法の世に沈みかけたタイタニックとみなし、嘆いている。また、日蓮の立正安国論(文応元年七月十六日、北条時頼に奏進したとされている)を引用し、終末的な不安感を駆り立て、それによって布教しようとしている。表紙には立正安国論と彗星の写真を掲載してある。

まとめ

出会った大学生は、まるでマインドコントロールにかかっているように、非常に熱く日蓮大聖人について語ってくれた。今回直接見学は出来なかったが、御本尊を持っている人の所に殆んど毎日集まっているとのことであった。彼の知人から聞いた話だと、研究室の中でも熱心に布教し、問題になっているとのことであった。証しや福音を少し聞いてもらったが、キリスト教に対してはキリストの処女降誕などを非科学的だとし、邪教であるというイメージを強く持っていた。また、作家遠藤周作が死を目前にした際に、恐れとおのきをもっていったことを指摘し、それに対して仏法に生きれば、臨終の際に穏やかな死を迎えることが出来ると力説してくれた。遠藤氏が持っていた母親的の神観だけでは死の問題に解決を得ることができないことを改めて考えさせられた。復活によって今も生きておられる救い主イエス様が彼を救って下さるように、続けて祈りつつ接していこうと思われている。